

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	超保守的文学研究教育者が映画を教える方法
著者	上西 哲雄
出典	中・四国アメリカ文学研究, , 51号,
発行日	2015, 6

超保守的文学研究教育者が映画を教える方法

・ 上 西 哲 雄

0. はじめに

この発題は、私が本来英文学の演習として用意された授業の科目名に、まさに（アメリカ文化）とつけ、映画を授業の中で取り上げた実践報告である。

私がこれまで授業で映画を使った例は、1998年4月（H10）から2007年3月（H19）まで在職した、札幌市にある北星学園大学の文学部英文学科における専門科目のアメリカ文学史と3年生および4年生向けの演習、その後現在まで勤めている東京工業大学における英語の授業においてである。文学史での使い方は断片的で、授業にアクセントをつける程度のものであった。英語の授業はリスニング専用の授業で使ったものだが、教科書会社が用意したものを使い、DVDを見せては教科書についている問題に回答させるという程度のものであった。それに比べて北星学園の3年生および4年生向けの演習では、ある意味で、映画を正面から取り上げたと言える。

北星学園大学の英文学科の演習の科目名はそれぞれ3年が「演習1」、4年が「演習2」で、括弧書きでその内容が分かるようにしてあり、私はいずれも（アメリカ文化）としていた。これだけを見れば映画をやることに何の問題もないようだが、実は教材として映画を使うことは、この授業でも殆どなかった。私の北星学園大学在籍は9年間で、北星のカリキュラムは完全に半期制であったからその間に18学期あり、演習は3年用と4年用があるので都合36回演習の機会があった。この間に映画を使ったのは、2002年の前期に「演習2」で『奇傑ゾロ』（*The Mark of Zorro*, 1920）を、2004年後期に「演習1」で『タクシー・ドライバー』（*Taxi Driver*, 1976）を取り上げただけであった。

なぜこの2回だけなのか、そしてなぜ2回だけだが映画を授業で使ったのかということが、この発題のポイントである。以下ではこのうち『タクシー・ドライバー』の事例を紹介しながら、このポイントに迫って行く。後者を事例とするのは、私は北星学園に赴任して以来教育の方法について試行錯誤を重ね、2003年度頃にはほぼ方法を固めたことによる。『奇傑ゾロ』を使った授業は、それ以前のものである。

1. 演習教育の目的

2003年に授業の方法を確立して後は、3年の前・後期、4年の前・後期で使う教材選びに明確な方針があった。学生に配布した説明を引用すると、3年の前期は「アメリカの小説を使って、テキストの向こうに文化を読む」として小説を読み、後期は「特定のアメリカの文化を対象に、アメリカ社会全体の中で文化を理解する」と文学以外の文化的なテキストを使った。4年の前期は「授業参加者の関心に従ってチームを編成し、それぞれのテーマでアメリカの文化・文学の研

究を進めます」として、グループ毎にテーマを決めて議論を構築することにし、後期は「卒業論文の執筆を、みんなで検討し合いながら行います」と、各自の卒論執筆に専念することにした。4年生向けの演習では、こちらからテキストを指定することをやめ、学習の段取りも細かくは学生の自主性をできるだけ尊重するようにした。これが、私が現在でも抱いている教育についての考え方を、授業の展開の方法に実体化したものであるので、ゾロを扱った2002年前期の演習Ⅱをこの発題で扱うのは、やめにしたのである。

3年の演習で扱ったテキストは、前期は小説、後期は文化という風に意識して選んだ。「超保守的文学研究教育者」と自称するには、半分は文化じゃないかと思われるかもしれない。しかし今のご時世を考えると、逆に半分は文学テキストだとも言える。演習の科目名では「アメリカ文化」と銘打っているにもかかわらず、学生は必ず二年間のうち一度は文学テキストに取り組む形になっている。また、文化と言ってもコミック、映画、アメリカ史の教科書と多様で、たとえば映画を特別扱いしていない。

4年の演習では、学生が自分の卒論を視野に、自分の関心のあるテーマを勉強する形をとっている。2004年1月に提出された卒論は16本。そのうち文学が「黒猫」(“The Black Cat”)の一本だけで、映画はない。大変多様なテーマで、科目名をアメリカ文化とただけあったという感じであった。2005年1月に提出されたものは全部で19本。そのうち文学が2本、映画が2本であった。私の最後の年、2006年の初めに提出された卒論は全体で14本、そのうち文学が2本に対して映画が4本という結果となった。2006年に卒論を提出した者が、本日紹介する3年生の時に演習で『タクシー・ドライバー』に取り組んだ学生達である。これだけでは何とも言えないが、映画を卒論にするものが4人になったのは、映画を3年生の時に扱ったのがいくらか影響しているかもしれない。ただ逆に、それにしても14本のうち映画を対象とした者が4本にとどまったのは、私の授業の中で映画が特権的なメディアあるいはテキストという扱いを受けていなかったことに原因があるかもしれない。

2. 演習教育の枠組

演習に限らず授業の初回では、大学の公式な講義要項などに載せるものに比べると遥かに詳しいシラバスを配るのを常とするが、映画『タクシー・ドライバー』を教材して扱う2004年度後期の3年演習で配布したA3一枚のシラバスにおいて、授業の内容の項目における『タクシー・ドライバー』への言及は「映画『タクシー・ドライバー』を対象に研究を進め、そこに断片的に盛り込まれている文化を調査し、作品の中でどのように機能しているかを見てみます。」という2行ほどの一文のみである。この一文の中の「映画『タクシー・ドライバー』」という箇所を、他のテキスト、たとえば「映画『イーザー・ライダー』(Easy Rider)」といった映画はもちろん、「小説『アブサロム、アブサロム!』(Absalom, Absalom!)」とか、場合によっては「アメリカにおける人種差別」といったテーマでも、何にでも入れ替えることが可能である。つまり、このシラバスはテンプレートになっていて、どのようなテキストでも入れることができるようになっている。

授業の最初に配布するこのシラバスには、私の教育観、特にゼミの教育についての考え方が大変よく出ている。特徴的なのは、「社会人」という言葉が、「授業の目標」というところで3回、

最後の「6 そのほか」のところにもダメ押しのように3回出てきていて、社会人になるために学ぶことを自覚するように学生に促している。具体的に社会人になるために学ぶことで私が支援できると考えたことが、「授業の目標」の項で書いた「1. 自分で議論を作る能力を養うこと」、「2. アメリカの文化について何か自分の意見が言えるようになること」、そして「3. チーム・ワークで仕事ができること」の三つである。実は2番目のアメリカの文化について何か自分の意見が言えるというのは、1の議論を作る能力を養うための訓練を、アメリカ文化を対象にやれば自然に身につくことだ。私の眼目は1の議論を作る能力と3のチーム・ワーク力にある。2番目のアメリカの文化は、日本の文化でも、音楽でも、政治でも、宗教でも実は何でも取り換え可能である。何かひとつ、独自の意見が言えれば良いというのが趣旨で、私がアメリカを専門とするので、「何か自分の意見が言えるようになる」対象を「アメリカの文化」にただけである。

3. 具体的な授業の展開

では、具体的にはどのように授業を展開するのか。具体的な詳細を記述する紙幅はないので、要点をごく簡単に説明すると次のようなものである。

授業の目標としてチーム・ワークを掲げているように、授業は1チーム4、5人のグループに分かれてやる。学期の前半、授業の2回目から5回目までは、毎回グループを変えて、与えられた課題に取り組む。私は、リベラル・アーツ大学の教育の目的はきちんとした社会人を育てることであり、その最たるものは他人と一緒に働く能力だと思っている。その能力が試されるのは、突然チームを組まされて、短時間の間に成果を挙げるのだと考えて、次々とメンバーを変えて作業をさせられるという形を取り入れた。後半の第6回以降は、グループを固定し、グループ別に考えた問題意識に基づく作業が中心となる。今度はメンバーを固定してじっくり作業をするのだが、課題は与えられず、自分達で一から考えなければならず、必要なチーム・ワークがより深いものになる。

もうひとつの授業の目標は議論を作る能力を養うことだが、授業の前半の5回ほどは、私から課題を出す。課題をこなすことで、議論を作るというのはどういうことかを体験的に知ってもらうためである。後半は課題を見つけるところから自分達で考えてやってもらう。前半で私が出す課題も、脚本を読んで疑問に思ったところを考えてくることであったり、脚本のテキストに出てくる時代的な事象を自分で拾い出して調べてくるというような、論文や発表のargumentのネタに当たるものをテキストから自分で探すことであり、教育と称してテーマや議論の方向性を私が誘導することはできるだけ排除するように心がけた。

最終的には授業の最後の2回を使って発表会を行い、後半に結成したグループ毎に研究発表を行うことになる。この発表は調べたことを発表するのではなくて、作品に見つけた疑問点を、それがなぜどのように疑問であるかを的確な引用を駆使しながら説明し、その疑問に対する答えの仮説を導き出す議論を、必ず外部調査も交えて展開するという発表でなければならないとし、こうした構成要素の質で互いに評価し合って、競わせる。評価は発表全体が技術的に洗練していることが肝なのだが、内容的には映画そのものを見るのではなくて、外部調査の作業にアメリカ文化の学習の肝があると考えている。

4. 授業で映画を扱う意義

ところでこのような授業展開の中で、脚本はともかく映画そのものに、まったくと言っていいほど触れていない。時間の関係で授業とは別の時間にDVDの上映会を行い、来られなかった学生にはDVDを貸し出すということをやった。その結果、学生の最終的な発表会での発表も、映像に関するものは記憶にない。すべて、物語の分析になっていた。

結局この3年生向けの演習の授業は、映画を教えるというよりも、映画を使って別の何かを教えるということになる。その何かは、少なくとも私自身は、社会で生きる力だと思っていて、冒頭紹介した私の教育の目的に合致する。映画はあくまで教育の道具でしかない。しかも、記録が残っている最後の4年間8回の教材を選ぶチャンスのうち1回しか映画を使っていない。当時の私の中に、映画を道具としてもそれほど切れ味のいい道具とする認識がなかったと言える。今なら私自身の力不足かもしれないとも思えるが、繰り返し述べたように、教育の目的が教材選択に左右されないことを考えると、映画を教材として使う頻度が少なかったことは、今から振り返っても問題はなかったと考える。むしろ教材選択は重要ではないということでは文学テキストにも言えるわけで、私の教育の中では文学テキストを使っているけれども、文学を教えるのではなくて文学を使って別のものを教えているわけである。

とは言っても、すべての私の演習を履修する学生は、一度は文学以外のテキストを使うようにしつらえてあるということも、無視することはできない。私の専門が文学であることから他の教材より巧みに使うことができるだろうということ、そのことと密接に関係しているだろうが、他の教材より教育的効果の切れ味が遥かに鋭いと私が信じていることがこの背景にはある。

このように言い募ると、上西は教育においては文学研究者としての立場を捨てるのか、上西にとって文学研究と文学教育は無関係な別モノなのかと思われるかもしれない。かなりの部分はそうだ。

しかしながら、それでもリベラル・アーツ大学の教育において、研究者としての立場で何かを得ようとしていたとすれば、文学テキストを読むことはそれほど重要ではなく、それはむしろ教材として映画やコミックや歴史の教科書を使うところにある。文学部なのに小説も読んだことのないような学生達とそうした様々なテキストに取り組むことで、ともすれば文学研究の狭いパラダイムに凝り固まってしまうがちな、自らの脳を解きほぐそうというわけである。そういう意味では、そもそもご紹介した演習の方式の中の、作業の出発点、テキストから疑問点を探してくる、というのは、私の脳のストレッチ、ヨガに最適だった。まったく予想外の疑問点や問題点を拾い出して驚かせてくれて、私の脳は心地よい筋肉痛を何度も味わった。北星学園大学の教え子たちには今でも感謝している。

このように、別に映画でなくても良かったのだが、文学とは違うテキストとして映画を教材として採用したにすぎないという開き直りの発題をしたが、映画を教材に使いながら、結局私がやらなかった大切なことを最後に報告して、今後の課題としたい。

私が見過ごしていたこと、それは視覚的な問題点である。私のやり方では、映画やコミックもすべて時間的、言語的なテキストに回収してしまうことに、当時の私は気づいていなかった。もちろん、映画もコミックも文学と同じく時間的な媒体ではあるのだが、そこには非時間的な視覚

的要素を中心に、文学には無い要素があるわけで、文学研究者が敢えて映画やコミックを教材に使うからには、それぞれの媒体に特徴的な面にきちんと注目するべきであったと、今は反省している。北星学園大学を離れて5年以上になる。この間に大学を取り巻く状況は、ますますその教育の目的、学科や専攻の存在意義を追及する方向に向かっている。学生が喜びそうな教材でお茶を濁すのではなく、学生が本当に必要な能力は何で、それをどのように身につけさせるのかということを考え無い限り、文学教育はもとより映画教育にも将来はない。